

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	甲田英一教授送別の辞
別タイトル	Farewell Professor Eiichi Kohda
作成者（著者）	長基, 雅司
公開者	東邦大学医学会
発行日	2013.03
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 60(3). p.151 151.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	退任記念
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.60.151
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD00790476

甲田英一教授送別の辞

長基 雅司

東邦大学医学部放射線医学講座（大橋）講師

甲田英一教授は平成15年に立川病院から異動され、東邦大学医学部放射線医学第2講座教授に就任されました。東邦大学医療センター大橋病院（以下、大橋病院）の放射線科としては4代目の教授としての就任となりました。約10年間の長いようで短い勤務となりましたが、臨床、教育、研究すべての分野で成し遂げられたご苦労はいかばかりであったかと、先生の前で学んだ同門、教室員一同、ご苦労をねぎらうとともに、長年にわたるご懇篤なご指導に心より感謝致しております。

先生はそのお人柄から、赴任された当初より病院内のシステムおよび機構にとってなくてはならない方となりました。大橋病院に対する多大なる貢献としては、平成18年から24年までは大橋病院の院長も兼務なされたことです。大橋病院の新病院計画の立ち上げ、画像システムの構築、病院収支の改善など院長職としてその激務の間も、決して診療や学生および研修医、さらに医局員の指導もおろそかになさらず、すべてをパーフェクトにこなされました。また院長職の間は、他科の医師や看護師、および放射線技師、事務職の方々の相談も一手に引き受けていました。

フットワークは軽く、“病院内の困り事はすべて院長に相談すれば解決してくれる”とばかりに、さまざまな事柄が院長に集中しており、目の回るような忙しさだったと思われます。まさに病院全体の理想の上司という感じでありました。このような激務の間も放射線科の読影数は常にナンバーワンで、各科からもレポートの詳細を尋ねる先生方が列をなしている状態でした。またこのような忙しい合間でも、常に医局員に対しては笑顔を絶やさず、医局員の面倒を見てくださる姿勢は医師としてのみならず、人間として見習うべきことでありました。

また東邦大学の放射線科全体のこともについてもご尽力頂き、大橋病院、大森病院、佐倉病院の放射線科を1つになされたことが一番の大きなお仕事でした。従来の古い慣習

にとられず、3病院の放射線科を1つに纏め上げられました。現在でも3病院の間で、症例検討会や新年会が行われており、交流が活発に行われています。また将来を見越して、3病院の放射線部門のシステムの整合性についても進めて頂きました。

診療面では先生は小児放射線診断、胸部放射線診断、骨軟部放射線診断などさまざまな分野の放射線診断がご専門で、いずれの学会でもご要職に就いておられました。また早くから医用分光光学のご研究に取り組んでいらっしゃり、この分野では世界的権威であります。さらに大橋病院で月1度の関東地方の小児放射線診断勉強会の代表世話人をお引き受けになられ、小児放射線診断に携わる他施設の先生方へのコンサルトもなされておりました。これらの得意分野のご指導と熱意は、東邦大学全体に広く知れわたり、レジデントの放射線科へのローテーターの数に制限を加えなければいけないほどでした。

先生のご趣味は幅広く、学生時代はヨット部に属しておられ、母校のヨット部のみならず東邦大学のヨット部の方々とも時々会合をもたれていたとお聞きしています。また読書量は半端ではなく、その分野も専門書のみならず歴史書、娯楽書などさまざまな分野にわたっており、医局員と本の貸し借りをを行うほどでした。その他にもオーディオ、カメラ、コンピューターなどのメカニカルなことにも造詣が深く、新しい機器の購入前後は楽しそうにお話しされていたことを思い出します。

このたび、放射線医学講座（大橋）教授をご退任なされますが、先生の実力およびそのお人柄から、東邦大学の特任教授としてまだ少し残られることとなりました。大橋病院がご活躍の場でなくなることは非常に寂しく残念ですが、今後は東邦大学全体のことを考えてご活躍されることを祈念いたしまして、送別の辞とさせていただきます。